

あじまりかん通信

あじまりかん友の会機関誌 *Newsletter from Fellowship for Ajimarikan Practitioners*



てんほく

天白岩倉遺跡——静岡県磐田市井伊神社境内の裏側(直虎ゆかりの地を訪ねる⑥)——渭伊神社と天白磐座遺跡)より

Vol.3 (2018) 第3号

隔月刊 あじまりかん通信 通巻第3号 2018年5月15日発行

あじまりかんの渦一円錐形はすべて神を表している(1)



図 1 : 上賀茂神社の立砂とは一体何か?! たただずならぬなぬきをを発はしている。



ひの み さき
図 3 : 日御碕神社龍蛇神
出雲大社にも同様の像がある。



図 2 : 神奈備山の代表・三輪山
美しい円錐形の山を、古代人は蛇がとぐろを
巻く姿に見立てた。

■あじまりかん通信とは

あじまりかん通信は、世界で唯一の「アジマリカン」の専門誌です。

「アジマリカン」は大和建国時より日本に伝わる大神呪だいじんじゆと呼ばれる不思議な言霊ことたまです。

あじまりかん友の会は、大神呪「アジマリカン」の研究や行法の普及、「アジマリカ行者」への情報提供や会員どうしの交流促進を目的として、2017年に設立されました。

「アジマリカン」とは、日本神話に登場する造化三神（創造神の本体に即した優れた概念です）の波動が顕在化したコトバナなのです。山陰神道やまかげなどの古神道では造化三神を大元霊だいげんれい、大元尊神だいげんそんしんなどと呼びますが、もう一つの神名「天津渦々志八津奈芸天祖大神あまつうずずしやつなぎあめのみおやのおおかみ」に、「アジマリカン」の本質が表されています。「アジマリカン」は、造化三神が渦巻きとなって宇宙を創造されるお姿が言霊となったもので、純粹な神のエネルギー波動が無条件で発動します。驚くべきことに、「アジマリカン」を唱えると、その響きの中に実神、すなわち、神の本体が顕現します。まことの神が波動として降臨するのです。その事実は、個人にとっても人類にとっても極めて重大な意義を持っています。誰もが「アジマリカン」を唱えることで、神の波動を体感し、神を直接認識できるといふことなのです。

「アジマリカン」の一声で、人は一瞬にして神になるのです。そして、人はその時から神として生きてゆくこととなります。この事実こそ、斎藤が『アジマリカンの降臨』で伝えたかったことなのです。

あじまりかん友の会は「アジマリカン」を友とした人生を歩む「あじまりかん行者」のための集いです。あじまりかん通信は、世の光・あじまりかん行者に向けた情報発信を行います。

「あじまりかん」の図

◎全体として宇宙創造・国産みを表す。また、陰陽

調和して生成発展する神の国を表す。

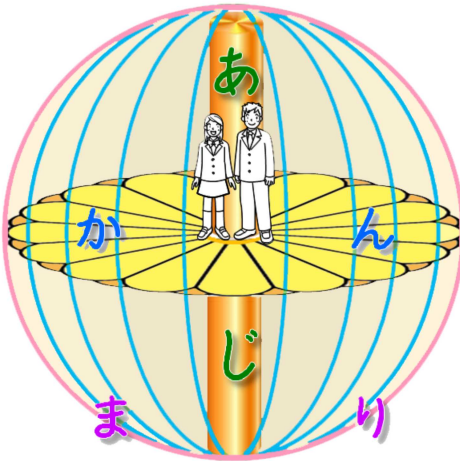
・ 中心の軸 …… あめのみはしら 天御柱。天之御中主神

・ 外側の球体……霊的な宇宙、三次元宇宙

・ 十六菊花紋……日本国（地球）・中心は天皇の座

・ 人物（男女）……人間ペア。高御産巢日神、たかみむすびのかみ神産巢

びのかみ日神のペア。イザナギ、イザナミのペア



目次

あじまりかん通信とは 1

あじまりかんの渦 (3) 3

読者のあじまりかん体験 24

あじまりかんQ & A 26

「あじまりかん」と合気道の関係 29

編集後記 32

あじまりかんの渦 (3)

斎藤敏一

第三章 あじまりかんの渦が働く仕組 (1)

◆「あじまりかんの渦」の秘密は山陰神道に伝承されていた！

第二章『霊界物語』に書かれた一厘の仕組とは？」で、「あじまりかん」は珍（渦）の御宝であることを述べた。本章では、「あじまりかん」の「渦」という性質についてさらに掘り下げよう。

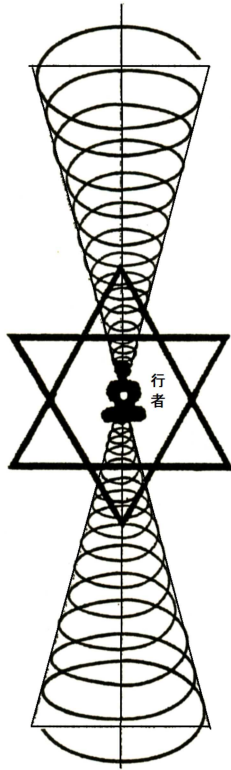
「あじまりかん」の秘密に関する故佐藤定吉博士の次の一節（再掲。参考文献『日本とはどんな国』）は、「あじまりかん」がまさに神の言霊であることを示すものだ。

その全体から来る霊的波長は、どうしても「神と人」が一如になり、「神」が人の中から顕現する時の響きのように受け取られる。

故山蔭基央師の『神道の神秘』に、大元霊の別名として「天津渦々志八津奈芸天祖大神」という神名が紹介されている。筆者は以前より、この名前こそが大神呪「あじまりかん」を説明する神名であると考えていた。

古代の偉大なる靈感者が、大元霊が働かれる姿（実際には神のエネルギー波動である）を「アチマリカム」と表現したので。

そのものズバリの証拠が、山蔭師の『神道の生き方』に図解として掲載されているのを発見した。その名も「大神呪『アジマリカン』の図」である。



大神呪「アジマリカン」の図：

副題「あまつうずうずし やつなぎのかむむすび天津渦々志八 繫之神結 Spiral energy field」左巻きは凝縮（求心力）・右巻きは拡散（遠心力）

【解説】

山蔭師の『神道の生き方』P. 125に掲載されているズバリの回答。左右の神代文字は「アチマリカム」。『神道の神秘』には、「天地初元の時からある『言霊』と説明されるだけで意味不明とされていた。本図は「あじまりかん」が大元霊の渦巻きであることを証している！

◎行者…天之御中主神に接続する。

◎螺旋…高御産巢日神（上）と神産巢日神（下）が渦を巻いて働かれる状態を示す。

この図に登場する副題「天津渦々志八繫之神結」とは、中央の「あじまりかん行者」が大元霊あま天津渦々志八繫之神つうずうすしやつなまきのかみの渦うずの中心かみに結むすびばれる（＝結）という意味になる。

山蔭師は別著『神道の神秘』で、「あじまりかん」は「天地初発の時からある言霊」としか言わず、大元霊と関連付けてはいない。

だが、同じ本の中で「天津渦々志八津奈芸天祖大神」は大元霊の別名であると明言している。「天津渦々志八繫之神」＝「天津渦々志八津奈芸天祖大神」（表記が異なるだけ）である。どうして「大元霊の言霊である」と明言しなかったのだろうか？ そのことが不思議でならない。

大神呪「アジマリカン」の図では、渦巻き＝螺旋がきれいに製図されている。そのことから、この図が比較的新しい時代に作成されたものであり、その意味が故山蔭師には伝えられてはいなかったことが推察される。山蔭師が前図の意味をご存じであれば、佐藤定吉博士に天皇行の解明を依頼する必要すらなかったと言えるからだ。

以上の考察より、「大神呪『アジマリカン』の図」こそ、「山蔭神道の最奥の秘伝」であり、「あじまりかん」大元霊の言霊の真義を伝えていると考えざるを得ない。

故山蔭師が「あじまりかん」の秘密を（敢えて？）解明しなかったのは、斎藤に発見させるためにとぼけ通したということかも知れない。神様事というものには人それぞれのお役目というものがあって、故山蔭師はとぼけるお役目で、筆者は突っ込みを入れる役目だったという見方も成立するのである。

そんな風に勘ぐるのは、前掲図が「**瞬間の谷間に入る秘術とは**」という「あじまりかん」とは無関係の記事に掲載されていたからだ。見事なおとぼけなのである。

故山蔭師晩年の著作である『神道の神秘』と『神道の生き方』の二冊を注意深く読めば、「あじまりかんとは何か」が自然に理解できる。やはり山蔭神道は「あじまりかんの秘密」を正しく伝承していたと言えるのだ。

◆他にもあった「あじまりかん」の渦・渦・渦

前項の「大神呪『アジマリカン』の図」には、螺旋状に放射される大元霊のエネルギー波動が描かれている。上下の螺旋をよく見ると円錐形をしており、上下で一对になっている。

円錐形で思い出すのは、京都の上賀茂神社（口絵・図1）の「立砂」と呼ばれる一对の円錐である。どうして思い出したのかと言えば、筆者は学生時代に度々京都の上賀茂神社に参拝したことがあるからだ。

上賀茂神社の背後にある神体山の「神山」を模したものだとか、ご祭神の賀茂別雷神が降臨される場所だとか言われており、ただならぬパワーを放射しているような気がする。

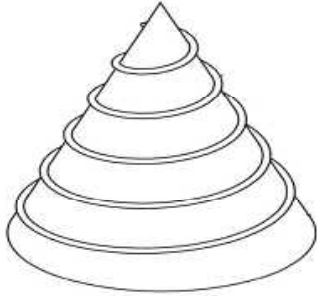
立砂の円錐形は左右で一对、アジマリカンの図の螺旋形は上下で一对となっている。左右と上下の違いはあるが、いずれも神聖な陽・陰のエネルギーを表していると考えることができる。

立砂以外にも円錐形で思い浮かぶものが幾つかある。三輪山などの神奈備山（口絵・図2）とか、出雲のとぐろを巻いた龍蛇神（口絵・図3。吉野裕子『蛇』講談社学術文庫が詳しい）、巻き貝（背表紙裏・図4）の形はいずれも円錐形である。鏡餅（背表紙裏・図5）の形も元々は「とぐろを巻いた蛇」の造形であるという説（吉野裕子『蛇』を参照）があり、円錐形に見えなくもない。

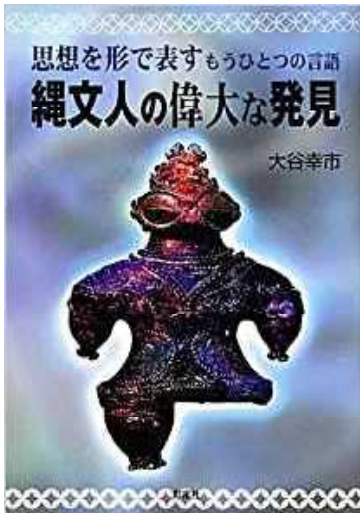
三輪山には原初の蛇信仰が根強く残っており、三輪山自体を「蛇神オオモノヌシがとぐろを巻いた姿に見立てる」ことも多い。

これらの円錐はすべて神を意味しており、縄文時代から日本人は円錐形を神のエネルギーが螺旋状に渦巻いている姿であると感得していたようだ。

縄文人は神を「渦巻く神聖な創造（むすび産霊）のエネルギーの流れ」と感じており、それを表現する手段としての幾何学が存在していた（大谷幸市『縄文人の偉大な発見』彩流社）という説がある。縄文の幾何学は曲線図形が基本となった位相幾何学（トポロジー）であり、森羅万象を生み出す異形同質を結ぶ方法だったという（大谷理論はかなり抽象的で分かりづらいので、詳細は割愛する）。



円錐螺旋：立砂とそっくり



遮光器土偶の腹部には渦巻きがデザインされている

大谷氏の発想「森羅万象を生み出す異形同質を結ぶ方法」は「アジマリカンの図」にも適用可能だ。

同図の「左巻きは凝縮（求心力）・右巻きは拡散（遠心力）」という概念は「異形同質の二種類の渦を結ぶ」に通じるもので、縄文時代から継承されたものである可能性が高い。

本書の「あじまりかんの渦」という概念そのものが縄文起源の幾何学思想の範疇に属するものであると言えるのだ。形あるものには相当の名前が存在する。縄文人は、右巻きの渦と左巻きの渦が接続した形を「アジマリカン」（古形は「アチマリカム」と呼んだのではないか？ その意味は「渦巻く陽・陰の神的エネルギーによる結び（産霊）」である。

「あじまりかん」をアジ、マリ、カンと三要素に分解して、語感や音感を頼りに意味を探ってみよう。「あじまりかん」を三つの要素に区切るという着想は、実際に「あじまりかん」を繰り返し唱えた際のリズムに由来する。「アジ／マリ／カン」の三拍子から、二つに区切るのが自然であると思われるからである。

筆者は言語学的な知識を持ち合わせないので、あくまでも（古代）日本語としての意味を直観的に推察するだけである。言語学的な解釈を行うには筆者の勉強が不足しており、今後の課題とさせていただきます。

・アジ——「アジマサ（蒲葵）」の「アジ」（古形は「アチ」）。蒲葵樹はその形態より男根の象徴で蛇、太陽神の意味を持つ（吉野裕子『扇―性と古代信仰』人文書院）。ズバリ「神」を表す言葉であると同観する。縄文人の蛇神信仰がベースに存在するのではないか。今のところ、それ以外の解釈は思いつかない。

補足… 山蔭流創生神樂第八十世・山蔭員英氏かすふさより、阿知使主あちのおみの「阿知」に由来するという説を聞いたことがある。しかし、それは原因と結果が逆になっていると思う。正しくは、東漢やまとのあやうじ氏の先祖が天皇家の司となった結果として「アチマリカム」の「アチ」を名前としたのではなからうか。山蔭員英氏からは、「思おも金神いかねのかみ」に関係があるというお話もあつたが、関連する情報が少ないので判断保留中である。



蒲葵樹(ウィキペディアより)。古代人は蒲葵樹の形態から男性のシンボルを連想したらしい(参考資料：吉野裕子『扇—性と古代信仰』)。

・マリ——「鞠」、「丸い」、「回り」等の字を当てることができる。「回転」、「螺旋」、「渦巻き」を表現する言霊である。

・カン——「噛む」、「神(カム)」、「完」等の字を当てることができる。「噛む」には「酒を造る」の意味がある。「産霊むすび」の意味を持つ言霊である。

以上のような考察より、「あじまりかん」は古代日本語であり、縄文語起源であるという可能性が高まるのである。三年前に「あじまりかん」の意味を調べ始めた時、「阿字真理観」などの漢字を当てはめているケースを散見したが、みなさん意味が分からないので四苦八苦しているようだ。「あじまりかん」を実際に唱えて、言霊として身体的に科学しなければ意味など分かるものではないのである。

本書の「はじめに」で、大神呪「あじまりかん」の意味は「神は渦巻きとなつて働かれる」であると述べた。今回の山蔭神道の「大神呪『あじまりかん』の図」の発見や古代日本の円錐形の造形の意味等の解析結果より、この解釈は素人の当て推量にしては「いい線行っている」ではなからうか。

この筆者の解釈を読者はどのように感じられるであろうか？

◆常時「大元霊」が渦巻く真名井神社の磐座について

去る三月三日に神戸で「あじまりかん講座」を開催したのであるが、参加されたYさんより次のような興味深い報告があった。

「元伊勢 籠神社（京都府丹後半島）」の奥宮「真名井神社」には古代の磐座（背表紙裏・図6）があつて、すごいパワースポットだと言われていますが、そこを訪れた時のことです。

私は時々霊的なものが見えたり感じたりする体質なのですが、初めてその磐座に行った時、（肉眼では見えない）巨大な竜巻のような渦があつて恐ろしいほどの勢いで渦巻いていました。

近寄りが見たいようなエネルギーを感じ、驚きを通り越して畏怖心抱くほどのものでした。あまりにも激しい渦だったので、恐ろしくて金縛りに遭ったような状態になり、腰を抜かすほどでした。

またその渦を見られるかと思つて、二度、三度と例の磐座を訪れたのですが、その渦巻きを見たのは最初の一回目だけでした。あの時だけ渦巻きを見ることができたのはどうしてだったのか、不思議でなりません。

以上のお話は、講座が終わつた後で喫茶店に有志が集まつて歓談した際に伺つたものだ。残念ながら、筆者にはYさんのような体験がないので想像をたくましくするしかないのであるが、そのような磐座が存在すること自体が驚異である。実際に磐座には高級神霊や宇宙の神が降臨されるのだという好例となる、貴重な体験談であつた。

磐座には本当に神が降臨するのであり、見る人が見れば如実に「今降臨中の神Ⅱ大元霊」を見ることができたり肌を感じたりすることができるといふことを意味する。Yさんの体験は、特別な神事の最中といふことではないので、磐座に常時神さま（大元霊）が降臨されており、その姿を渦巻きとしてYさんにお見せになつたといふことだろう。

真名井神社の磐座主座しゅざの神様は「豊受大神」といふことになつてゐるが、「天之御中主大神れいじ時」とは「まつりのにわ」といふ意味の柱が立つてゐるので、大元霊をお祀りしてゐるに違ひない。

「あじまりかん」の霊の本体である宇宙の大神さまが降臨される磐座であろう。

このように、宇宙創造神としての天之御中神をお祀りしているとところは極めて珍しいものであり、それだけに、籠神社は極めて古い歴史のある聖地だといふことになる。磐座祭祀の起源は縄文時代であ

ることがうかがわれる。

参考までに、ホームページ、京都府 Travel.jp 旅行ガイド「京都・天橋立『真名井神社』」(ここはパワースポットを超えた『聖地』だ!) より、真名井神社の磐座に関する内容を紹介します。

ちょうど本殿の真後ろにあるのが大きな磐座。画像の手前の磐座は天照大御神、そしてイザナギ・イザナミを祀り、奥の磐座には豊受大御神を祀っています。そうなのです、ここは日本を作ったイザナギ・イザナミと共に伊勢神宮・内宮外宮の主祭神を祀っているという、よく考えるところでもない場所なのです。実に2500年前からそのままの形で祀られているという、古代の祭祀場だとされています。

この磐座から発せられるパワーというかオーラというか、少し恐怖感を覚えるような”気”に満ちています。何も感じない人でも「何だかここ、すごいな」と感じられ、軽々しく踏み込んではいけない場所なのかもと思わせる雰囲気です。実際に地元の天橋立観光協会では「不純な気持ちでの参拝はお控えください」との注意もしていて、私も確かにその通りだと実感しました。

神社ができる遙か昔から、ずっと人々はここで祈りを捧げていたのでしょうか。京都ではこのような磐座のある神社は他にもあるのですが、その中でもトップクラスの威圧感、パワーを感じるのが、ここ真名井神社の磐座です。

境内には他にも大小の磐座が点在していて、その磐座に祀られている神々も錚々たる名前が揃っており、真名井神社の格式の高さがわかります。背後の山は禁足地とされていて、まさに聖地のような扱いです。

創建の古い神社には社殿のない神社も日本には存在しますが、ここ真名井神社も神社の起源とも言うべき磐座信仰を現代に伝える貴重な場所なのかもしれません。そしてここまで”何か”の存在を感じられるような場所は京都、いや日本でも本当に珍しい場所だと思えます。それ故に日本屈指のパワースポットとも称されるのではないのでしょうか。

心を整えて、参拝しましょう

天橋立という屈指の観光地エリアにある為、ついつい観光気分で足を運びそうになってしまいますが、この真名井神社への参拝は十分に心を整えてからの方が良いということはお伝えした通りです。なお、鎌倉時代に作られた御成敗式目にはこうあります。

「神は人の敬により威を増し 人は神の徳によりて運を添ふ」

近年のパワースポットブームに水を差すわけではないのですが、あまりこういう神社が観光地化するの如何なものかと思えます。そもそも神社というものは神様がいらっしやる神聖な領域。それを再度認識した上で私たちは参拝するべきなんでしょうね。

素晴らしい紹介内容だったので、引用が長くなってしまった。旅行ガイドに書かれているように、心して参拝すべきであろう。

真名井神社の磐座に参拝すれば、誰でも圧倒的な神気に打たれたり感じたりすることだ。筆者も籠神社には参拝したことがあるが、真名井神社にはまだお参りしていない。是非とも行ってみたいところである。

「日頃『あじまりかん』を唱えていてもなかなか実感を得られない」という方には朗報である。

「あじまりかん」を唱えずとも、参拝するだけで神さまの気を浴びて神さま（大元霊）を肌身に感じることができると聖地が存在する。日本には、このような貴い場所が今でも存在するのだ。神さまを肌身で感じたいと思っておられる方は、何をしても参拝すべきであろう。

◆「あじまりかん」で「とどめの神」を地上に留める！

近日中（2018年5月）に私の新書『すべてがひっくり返る』がヒカルランドより出版される予定だが、新著から、とっておきの「あじまりかんの秘密」を抜き出して内緒で紹介しよう。以下は、ごく最近、ふとした瞬間にひらめいたことを書き留めたものだ。

何がひらめいたのか？

それは「とどめの神」の意味である。「とどめの神」の普通の意味は「最後にお出ましになる大神さま」である。実は「とどめの神」という表現には、もう一つの重大な意味が隠されていたことに気付いたのだ。

もう一つの重大な意味とは、「大神さまを地上に留める」という意味である。これは「なるほど！」の解釈なのだ。

一人で喜んでいてもしようがないので、その意味を解説しよう。

(新著の)冒頭で、「大神さま」とは「大元霊」であり、人間が「実体として認識可能な最高神」であると述べたことを思い出してほしい。

次に「とどめ」⇨「留める」であることに注目したい。

重要なのは、「確実に大神さまに地上に留まっていたたく」必要があるということだ。単に最高神を認識すればよいのではないのである。大元霊を感得するということだけであれば、過去の多くの古神道系修行者がやってきたはずだ(それだけでも大変なことなのだが……)。だが、それだけでは駄目なのだ。大神さま⇨大元霊がこの地上に臨在し続けること、**大元霊が地上に留まること**が絶対条件なのだ。

「とどめ⇨留める」という着想は語呂合わせであり、悪く言えば「親父ギヤグ」みたいなノリだが、親父ギヤグ結構なのだ。神の経綸は、霊界物語に登場する「珍の御宝⇨渦の御宝」もそうだが、語呂合わせで解けてしまうのである。

日本語を使う人間でなければ、神さまのみ心は分からない。そういう仕組になっているのだから仕方がない。だから、「とどめの神」は先ず日本に降臨する(既に降臨している)のである。

「確実に大神さま⇨大元霊に地上に留まっていたたく」方法があるのか?

嬉しいことにその方法が見つかったのだ。それが「あじまりかん」なのである。

「あじまりかん」を唱えようと、**大神さまが唱えた人の中に留まる(記事「あじまりかんQ&A」参照)**のだ。だから「あじまりかん」はすごいのである。私は(新著)第二章の、『あじまりかん』と神⇨大元霊の関係』という節で、次のようなことを書いた。

私の中に「あじまりかん」という実体（波動的な実体である！）が入ってしまったっており、自分が「あじまりかん」なのか、それとも「あじまりかん」が自分なのか区別できなくなった。

「あじまりかん」を唱えて続けるだけで、誰もが私と同じような状態になるのだ。もちろん誰でもすぐに実感できるというわけではない。だが、実感できるようになるのは時間の問題である。だから、常々『あじまりかん』を百万回唱えて「らん」（回数単なる目安）と勧めているのである。

「あじまりかん」⇨大元霊と人間が一つになってしまふこと。これは素晴らしい悟り⇨自己実現である。

「あじまりかん」は願いを叶えるための不思議な呪文という枠に収まるものではない。「あじまりかん」は唱えた人を神化⇨神に変えてしまふ言霊なのである。

「あじまりかん」で神化した人が大勢登場することによって、「とどめの神の経緯」が大きく回り始めるのであり、文字通りの地上天国が創られてゆくのだ。地上天国実現の絶対条件が「大神さま⇨大元霊が地上に留まり続けること」なのだ。

ちなみに筆者は、每晚9時に数分間「アジマリカンの降臨放送」を行っている。これは、「あじまりかん」で大元霊が降臨されている」という拙著のコンテンツを霊的にダウンロード可能とする試みである。霊的な世界のこと、心に思うだけで瞬時に実行されるといふ性質を持っている。だから、筆者の「アジマリカンの降臨放送」に心を向けるだけで、大元霊の波動を受けることができるというものだ。要するにスマホでアプリをダウンロードするような感覚で、神さまの世界の霊的なコンテンツ『アジマリカンの降臨』を受信できてしまふのだ。

もちろん受信料はいただかない。夜の9時になったら、是非、筆者に心を同調させてみてほしい。そして、何か受信できたら、ご報告いただきたい。受信しにくい場合も、ご報告いただければ幸いである。「アジマリカンの降臨放送」は、単なる斎藤の思い付きではない。「みろくの世ならではの「実験」である。その意味は、既にこの日本ちきゅうにとどめの神大元霊が降臨されており、みろくの世になっているからこそその実験なのだ。

とどめの神大元霊が降臨したみろくの世では、霊的な内容を簡単にやり取りすることが可能だからだ。みろくの世大元霊の世界では、あじまりかん行者どうしで心と心がつながってしまうので、霊的な情報も簡単にやり取りできるというわけだ。このような出来事はこれから本当に起こってくるのだ。

「嘘だと思うかも知れないが、とにかく見てごらん。『大元霊の降臨』という出来事が普通に起きてきますよ」ということなのだ。そういうことが当たり前になるのがみろくの世なのであり、あなた方「あじまりかん行者」はミロク世の先駆け的存在なのである。「あじまりかん行者」はミロク世の最先端を走っているのである。

◆ようやく分かった自霊拝の意味——「あじまりかん」の結果を検証する

最近、自霊拝の意味と役割がハッキリと見えてきた。

「天皇行法は『自霊拝』と『あじまりかん』の二種類の行法から成り立っている」

これは、佐藤定吉博士の『日本とはどんな国』に書かれていたことだが、どうして二種類の行法が存在するのか、今一つ明確になっていなかった。

だが、筆者の自霊拝実践時の最近の体験を通じて、これらの修行の役割と関係が明確になった。昨年（2017年）末の「あじまりかん講座」において、「自霊拝」についての質問があったので、メールマガジンで自霊拝の意味ややり方を説明した。「自霊拝」と「あじまりかん」は全く異なる行法なので、各行法の特徴を理解して「合わせ技」として実践すると、相乗効果で著しい靈性開發が期待できる。

先ず、メールマガジン「あじまりかんと自霊拝」の内容を再掲しよう。

* * *

①自霊拝の意味とやり方について

神社にお参りすると、拝殿の前や正面に鏡が掲げられている。凸面鏡になっており、よく磨かれた鏡面には自分の姿が小さく映る。私の家の仕事部屋には神棚があるが、その神棚の正面にも小さな鏡があり、真正面から鏡をよく見ると自分が映っていることが分かる。だが、凸面鏡なので映っている自分の姿はあまりにも小さく、ここで語る自霊拝という目的にはかなわない。

この鏡は、起源としては日本書紀の天孫降臨の段に登場する同床どうしよっきょうでん共殿の神勅やたのかがみに出てくる八咫鏡（三種の神器の一つ）がモデルとなっている。

この八咫鏡は本来、天皇の生活空間に常時かけておくためのものだ。ところが、現在は伊勢神宮に秘匿され天皇すら拝することができないという異常な状態になっている。人は「恐れ多い」と言うが、ただの鏡である。ちっとも畏れる必要はない。そういうおかしな八咫鏡のことはひとまず忘れよう。

実際に我々が自霊拝という行為（修行）を行う場合には、壁に掛かった普通の姿見や洗面所の鏡を使う。両手で合掌する必要があるので、手鏡は駄目である。少なくとも上半身（頭とバスト）が映る鏡が望ましい。

同床共殿の神勅の主旨は、「鏡に映った自分の姿を神として拝みなさい」ということだ。非常に単純だが、それだけに難しい修行である。自霊拝という言葉の意味は、「自分の霊を拝む」ということだが、この霊とは直霊（直日霊）のことだ。つまり自霊拝とは、神から直に分かれた自分の霊を拝むということに尽きる。こういう素晴らしい教えが日本神話には秘められているのだ。

このように自霊拝は単純明快な修行だが、それだけに非常に厳しい修行であるという言い方もできる。なぜかと言えば、通常は鏡に映った自分の姿を神であるとは思えないからだ。鏡にはいつもの自分が映っているだけなのに、それを神さまと思うなどという芸当は普通なかなかできるものではない。いきおい、真剣にならざるを得ないわけだ。

あじまりかん講座の当日、参加者から「自霊拝を実践してますか？」という質問を受けた。私は、毎日自霊拝を忘れずに実践しているので、「はい、やっていますよ」と答えた。

さらに、「正しいやり方とかはありますか？」と聞かれた。私の回答は「自分を必死の覚悟で拝み倒すことだ」というものであった。実際、最初の頃はかなり気合いを入れて拝んでいた（今はそうでもない）。拝みながら「神さまありがとございます。ご苦労さまです」と挨拶する。それにかかる時間は十数秒というところだろうか、あつという間に終わってしまう。

必ずしも私のようにやる必要はないが、「自霊拝を真剣にやればやっただけのことはある」というのが私の見解だ。一種の心構えが必要なので、自霊拝を始める時は少し抵抗を感じることがある。そこを

乗り越えれば、後は習慣になるので楽にできるようになる。

最初だけはあじまりかんを唱えるよりも難しいかも知れない。だが、実際にやってみると効果は非常に大きい。何よりも良いのは、自分が好きになり、「私は貴い神である」という自覚が深まることだ。

②自霊拝とあじまりかんの関係

自霊拝とあじまりかんは全く異なる修行なので、車の両輪のような関係になる。あじまりかんで神の顕現・降臨を受けて、自霊拝で顕現・降臨した神（自分の姿として顕現している）を拝むという関係である。

修行の目的や方法が異なるので、どっちがどうだという比較はあまり意味がない。また、どっちを先にやるのかということも明確には決められない。私の場合は、先に「あじまりかん」、次に「自霊拝」であった。しかし、これは結果論であり、決まり事ではない。

大切なのは、「自霊拝」にしても「あじまりかん」にしても、その意味をよく理解して実践することだ。どちらも素晴らしい行法なので、毎日続けることであなたの神性が日に日に開発されるだろう。また、貴方の人相も日増しに良くなってゆくことだろう。

◆自霊拝では誰にでも「あつ、神さまだ！」体験が起きる！

自霊拝とは、日本書紀の天孫降臨の段で天照大神が瓊瓊杵尊（にぎぎのみこと）に降した、同床共殿（どうしじょうきょうだん）の神勅に起源を持つと考えられている。同床共殿の神勅とは次のようなものだ。

【同床共殿（宝鏡奉斎）の神勅】

読み下し文…吾が児、此の宝鏡を視まさむこと、当に吾を視るがごとくすべし。与に床を同くし殿を共にして、斎鏡となすべし。

大意 …この宝鏡（八咫鏡）を見る際は、まさに私を見るような気持ちで見なさい。いつも宝鏡

と同じ部屋で起居し、祀りを続けていきなさい。

この自霊拝を私自身が約半年の間真剣に行じたところ、最近になって、鏡に映った自分を本当に神と
思えるようになったのだ。時折、白光に包まれた神々しい自分の姿を拝むことができるようになった
のだ。

自霊拝を始めた頃は、鏡の中の自分を無理やり「神さまだ」として拝んでいた。かなり気合いを入れ
ていたのだ。だが、最近はそのようなことはなくなり、鏡に映った自分の姿を見て、ごく自然に「神さま
がいる」と思えるようになったのである。

「あれ、これはどうしたことだろう？ いつの間にか神さまになっちゃった」という感覚である。こ
の「神さまになっちゃった」という感覚が重要である。この体験に自分自身が驚いたのであるが、驚く
と同時に自霊拝の意味が分かったのだ。

この時の感覚を「あつ、神さまだ！」体験とでも名付けよう。

この体験は私だけのものではなく、「あじまりかんと自霊拝」を実践する誰にでも起こることだ。誰

でも鏡に映った自分の姿を見て、「あつ、神さまだ！」と思う時が来るのである。既に私と同様の体験をされている方もおられるに違いない（報告を待っています）。

鏡は嘘をつかない。そのままの自分を映し出すからだ。そのままの自分がいつの間にか神さまになつてしまったことが分かつたのだ。これは来る日も来る日も「あじまりかん」を唱えた結果である。

「なるほどそういうことだったのか。自霊拝で現在の自分の状態が分かるのだ」

『あじまりかん』を唱えると神になる」ということを、私は自著の中で繰り返し語ってきたのだが、この体験をするまでは一つの疑問が残っていた。最後の疑問と言つてもよい。

それは、「あじまりかん行者が本当に神になつたかどうかをどうやって知るのだろうか？」という疑問である。

その疑問に対する回答がようやく、図らずして与えられた。自霊拝こそが自身の「神さまへの到達度」を測る行法だったのだ。

だから、天皇行法は「自霊拝」と「あじまりかん」がセットになつていたので。

自霊拝を行えば、鏡に映った自分の姿を見ることで、自然に自分が神さまになつたことが体験的に分かる。「あじまりかん」を唱えている自身を日々点検することが可能になるのだ。

もちろん「神さま」になつたから「あじまりかん」を唱えなくてもよいということではない。自霊拝で「あじまりかん」**修行の到達度**「神が自分の中に留まっているかどうか」を**チェック**できるということが重要なのである。

ここに至つて、「天皇行法というシステムの完成度が極めて高い」ことが証明されたのだ。天皇行法には到達度チェックの仕組が最初から備わっていたのである。

信じられないぐらい良くできたシステムではないか！

本章（前半）の結論としては、次のように整理できる。

- ・「あじまりかん」とは神の渦巻きエネルギーの波動で、唱えた人に神が留まる。
- ・「自霊拝」によって、行者がどの程度の段階に至ったかどうかを測ることができる。

霊性開発のためには、天皇行法「自霊拝とあじまりかん」一本でよいのだ。それさえ継続してゆけば、誰でも神になれるし、神になったことが分かるのである。

筆者は最近の自霊拝時の「あっ、神さまだ！」体験によって、改めて「自霊拝とあじまりかん」を続けていこうと思ったのである。

「第四章 あじまりかんの渦が働く仕組(2)」に続く……

読者のあじまりかん体験

☆お腹で「あじまりかん」を唱えています

あじまりかん通信誌上では初めての登場になります、副代表の斎藤です。これからは、私もペー
ジをもらって、少しずつ書かせていただくこと
になりました。今後ともよろしく願います。

私が最初に「あじまりかん」という言葉を主人
から聞いた時（三年前）、生まれて初めて聞く言葉
だったのでなかなか覚えられず、主人からは「ど
うしてたった六文字の言葉を忘れるのかな」と散
々言われました。覚えるためにホワイトボードに
赤マジックで「アジマリカン」と書いたのが今で
もそのまま消されることなく残っています。

そういう意味では、「あじまりかん」は私にとっ
ては特別な思い出がある言葉です。

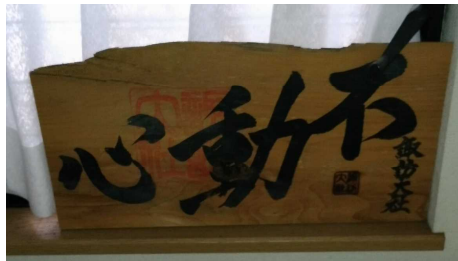
実は、主人が「あじまりかん」ということを言

い出す三年前に、諏訪大社のツアーに主人と二人
で行ってきたのですが、その時に御柱おんはしらから切り取
った板に「不動心」と墨書されたものを買って帰
りました。

主人に言わせれば、不
動心は私にとってとて
も大切な目標だとい
うことでした。あじまりか
ん体験ということでは
ないので、私が不動心
を指して具体的にどう
いうことをやってきた
かについては省略させ
ていただきます。

とにかく主人は理詰めで攻めてくる人で、その
突っ込みたるやしつこくて、「あじまりかん」をや
り始めた頃は大変でした。

「あじまりかんで全人類が救われるんだよ」と
か「あじまりかんを唱えるだけで神になっちゃう



御柱から作られた額

んだよ」など、色々と「あじまりかん」の話を聞かされました。お蔭で主人が考えていることは大体のところ分かったのですが、肝心の私自身の問題がなかなか片付きません。

私自身の問題とは、感情的になりやすいということが大きいと思います。

私自身の問題を解決するには「やっぱり不動心にならなきゃ駄目だ」と主人から言われるのですが、なかなか難しいです。

主人も私も両方とも本音人間なので、本音と本音がぶつかり合うことが多く、夫婦間のコミュニケーションはけっこう大変です。大半は私が折れますが、主人も少しずつ柔らかくなってきて、以前よりはかなりましになってきたと思います。

でも最近ようやく、どうしたら不動心になれるか分かってきました。感情的になった時には気が上半身に上がってしまつて、気持ちちが安定しない状態になります。何が悪いのかと言えば、自分の心（魂）がお腹の中に納ま^{おさま}っていないということ

のようです。

腹式呼吸が良いということを主人から聞いていたのですが、生まれてこの方やったことがないので、つい最近主人から実地で教えてもらいました。その結果、ようやく心をお腹に鎮めることができようになりました。腹式呼吸をしながら「あじまりかん」を唱えると、とても落ち着いて気持ちが良いことが分かってきました。

私が目指している不動心というのが、やっと見えてきたように思います。

このように、齋藤と出会って色々と大変な人生となっているのですが、あじまりかん友の会の副代表というお役目をいただいているので、何とか皆さんのお役に立てるよう頑張つてまいります。

あじまりかん体験や感想を募集します。
採用された方にはあじまりかんグッズを進呈 → tomonokai@ajimarikan.com

あじまりかんQ&A

Q

「あじまりかん百万回」というお話が出ていますが、実際に数えるとなるとなかなか大変です。数える必要があるのでしょうか？ 数えなくても、唱えているうちにいつの間にか百万回唱えてしまいうんじゃないでしょうか？

A

確かにおっしゃる通りです。私自身数えたことがありません。回数というのは一応の目安というか目標になるので、達成感を得るには一つの方法だと思いますが、数えること自体は目標ではありません。

これはあくまでも計算方法のお話ですが、一時間「あじまりかん」を唱えると大体三千回ぐらい可能です。そのペースで三時間唱えれば九千回になります。百日で九十万回唱えることになります。

Q

一日十五分だけ唱えるとすれば、百万回唱えるには四年ぐらいかかります。

いずれにせよ、自分のペースで唱えればよいのです。唱える回数はいくまでも一つの目安でしかなく、数えなければならぬということではありません。

ただ、唱える以上は「あじまりかん」のリズムや響きに集中した方がよいと思います。せっかく「あじまりかん」を唱えるのですから、何となく唱えるよりは一生懸命唱える方がよいです。また、自分なりの目標を定めて唱える方が身が入ります。その辺りは唱える人の工夫次第でしょう。

「あじまりかん」を唱える回数に関係する質問ですが、どこまで唱えたらよいのでしょうか？ 例えば、ある段階に達したら「あじまりかん」を唱えなくてもよいようになるみたいなことはあるのでしょうか？

A

良い質問だと思えます。「あじまりかん」を唱えていけば、いつの日か唱える必要がなくなるのではないかということですね。

確かにそういう日がやってきます。「そういう日」とは、次のような状態になった時です。倦まずたゆまず「あじまりかん」を唱え続け、ゆくと、ある日、自分の腹の中に「あじまりかん」という実体がストンと入ってしまうというようなことが起きます（これは私の体験ですが、感じ方は人それぞれです）。

「あれっ。自分の身体の中に『あじまりかん』が入ったみたいだ」と感じるような状態になることが起きることが分かっていきます。でも最初はその状態が続きません。いつの間にか、自分の身体の中から「あじまりかん」がいなくなりません。「あれっ、あじまりかんがいなくなりました。寂しいなあ」というような感じですよ。そこで、また毎日「あじまりかん」を唱えて

いると、自分の中で再び「あじまりかん」が鳴っているような体験をします。このような体験を繰り返しているうちに、自分の中に「あじまりかん」が長時間留まるようになります。私はいつの間にかそういう状態になってしまいました。もちろん、この状態は望ましいものですよ。

「神人一如」という言葉がありますが、身体の中に入った「あじまりかん」の実体とは大元霊＝宇宙創造神（の波動的な流れ、分流）なので、素晴らしいことなのです。常に自分の中に神を感じている状態なのです。そのような状態になれば、強いて「あじまりかん」を唱えなくても、自分の中の「あじまりかん」（＝神さま）が、いつも鳴っている＝成っているということになります。

「あじまりかんを唱えると神に成る」とはそういう意味なのです。私自身そういう状態に実際にならなってみて、よいものだと思うていま

す。とにかく「これは面白いな」と思えるような状態です。自分が宇宙と一つになったように感じられ、宇宙の中のあらゆるものにながっているような感覚です。心で思うだけで何でも実現しそうな気分になります。

こういう状態になれば、「あじまりかん」は自分の中から響いてきます。だから普段はあまり自分から「あじまりかん」を唱えようとは思わなくなるのですが、実際のところは意識して「あじまりかん」を唱えている自分を発見します。

なぜかと言えば、肉体を持って生きている以上、この世界との色々な関わりがあって、様々な波動が自分の中に飛び込んでくるからです。自分の中に飛び込んでくる波動の大部分は浄化されるために飛び込んできます。そうになると、肉体的には苦しいような状況になるので、気持ちを取り直して「あじまりかん」を唱えるということになります。

「あじまりかん」を意識して唱えると色々な悪い波動が浄化されていきます。自分の身体が一種の霊的な洗濯機のようになってしまいうのですが、そうなった場合は（意識して）浄める必要があるのです。

「あじまりかん」の言葉はとても強力なので、悪いものが入ってきててもどんどん浄まってきます。こうなると「あじまりかん」を唱えるということが仕事（修行）になってしまいうわけです。

一生懸命「あじまりかん」を唱えて神人一如になっても、相変わらず「あじまりかん」を唱えるということですよ。

質問を募集します。質問が採用された方にはあじまりかんグッズを進呈 ↓
monokai@ajimarikan.com

随想 あじまりかんの肝

「あじまりかん」と合気道の関係

今回の「あじまりかんの肝」は、「あじまりかん」と合気道の関係についてお話しします。

「あじまりかんを科学する」とは？

拙著『アジマリカンの降臨』において、「あじまりかんは科学である」ということを語りました。「あじまりかんの科学」というものがあると考えているのです。

この科学とは、「自分の心身を使って神さまなどの霊的事象を科学する」という生き方を意味しています。私の姿勢として、身をもって体験したことだけお話しするように心がけています。

これは、従来の物質科学とは全く異なっており、体験的に確かめるという意味の霊的な科学になります。みろくの世の科学は、霊の世界をも含めた科学的な

で、先ずは肉体を使って経験を集積してゆくというアプローチが必要になるのです。

私が「身をもって体験したこと」と言う場合、それは「身をもって神の存在を体験したこと」という意味で使います。この一節の意味を正しく理解していただくには、もう少し説明が必要になります。

「自分の身体を使って」という以上、「そもそも神という目に見えない存在を体験したり認識したりすることが可能なのか？」という疑問を抱く方が出てきても不思議ではありません。

斎藤は自分の身体で、神や霊などの目に見えない存在を波動的に検知することができます。自分は昔からそういう体質なので、誰でも私と同じように感じることもできると思っていました。ところが、妻に自分が感じているものを確かめると「感じない」と言われることが多いです。

ですが、よくよく尋ねてみると「何となくこういう感じ」というものはあるようです。そういう場合、私を感じているものと基本的には一致しています。誰でもある程度は目に見えないものを感じることもできる

ようです。

ただ、私の場合、その感覚をいつも普通に使っているの、妻よりはハッキリ感じるといふ事情があるらしいです。多くの人は私の妻と同じように「神や霊を感じない」と思い込んでいるだけで、実際には感じているというのが正しいと思います。

気配や雰囲気と言えば、誰でも分かるでしょう。「気配や雰囲気を感じる能力だったら誰でも持っている」ということは正しいと思います。

この能力は実は霊的な能力なのです。次に、無用な誤解を避けるため、本項で筆者が使用する「科学」という言葉の定義を明確にしておきましょう。

本項における「科学」とは、「神の存在を大前提とする科学」です。「神」とは「目に見えないけれども実在する貴い霊的存在」という意味です。すべては「神の存在」という一点からスタートします。

「あじまりかん」は合気道以上のものです

「あじまりかんの科学」とは、「あじまりかん行者」が、各々の肉体を使つて体験を積み重ねてゆくといふ、掛け値なしの方法論です。

合気道の開祖・植芝盛平翁によれば、合気道とは翁が猿田彦大神そのものとなつて生み出された、神と一体のミロク世の武道だということです。肉体（魂魄のこんぱく「魄」はく）だけでなく、霊（魂魄の「魂」）の修行も行います。このことを頭に入れておいて下さい。

合気道などの武道では、日々の修練が欠かせないものですが、「あじまりかん」の場合は、日々「あじまりかん」を唱えて自己点検することが武道の修練に相当します。合気道のように身体を動かす必要はありませんが、心と声を使つて身体に「あじまりかん」を鳴り響かせなければなりません。

この方法は武道には見えませんが、知らず知らずのうちに心身を使っているの、立派な武道なのです。

この方法に従えば、合気道開祖の植芝盛平翁のような達人になつてしまうのです。

どうしてそうなるのでしょうか？ それは次のような理由からです。

「あじまりかん」を唱えれば唱えるほど、大神さまより御霊みたまをいただくことができます。これを「御霊のふゆ」と呼びます。元の意味は「神さまからお蔭をいただく」ですが、実際に御霊が増えるのです。だから、「あじまりかん行者」は絶え間なく霊的な成長を積み重ねていくことができるということになります。

そして、いつの間にか、想像もできないほどの魂力たまちから・霊力をいただいでしまうのです。「あじまりかん行者」は知らず知らずのうちに、魂的に霊的に大きく育つてゆくのです。

日々「あじまりかん」を唱え続けるといふ積み重ね、鍛錬の効果は武道の修練と全く変わらないのです。

掛け値なしの体験の集積こそが科学なのです。それも「あじまりかん行者」が自分の心身を使つて体験を積み重ねるといふ、武道と全く同一の仕組を使う科学なのです。

それしか実効性のある方法は存在しないのです。そして、「あじまりかん行者」は最終的に、大神さまと一体の神人になってしまうのです。これは合気道開祖の植芝盛平翁と同じ境地なのです。

もちろんこれは、我々「あじまりかん行者」が完全に翁のような武道の神さまと等しくなるといふ意味ではありません。ですが、翁と同じ世界に到達可能なのです。しかも、合気道とは違って、身体を痛めることもなく楽に達人の境地に入つてゆくことができます。これは本当に本当のことなのです。

そのようにいいことづくめなのが「あじまりかん」なのです。

翁は合気道の道を自らの人生として示されたのですが、誰でもできる道としては未完成です。

「あじまりかん」の修行は植芝盛平翁が提唱された合気道と全く同じ効果を持つだけでなく、合気道以上の力を持っています。なぜなら、二歳の子供でも「あじまりかん」を唱えることができるからです。「あじまりかん」を唱え続ければ、誰でも霊肉ともに完全な達人になれるのです。

「あじまりかん」が合気道以上のものであるという話は長くなりそうなので、また次の機会にいたします。

編集後記

あじまりかん友の会のある相模原では、早くも桜が満開となり、今年も美しい花を咲かせてくれている。

毎年のことだが、桜の花が咲く頃になると、なぜだか分からない心がざわついてきて、花見に行きたくなってしまう。そういう人は多いのではなからうか。私もそのクチの人間だ。

桜の花ということで、最近読んだ本『純神道入門』（坂口光男、東明社）に、面白い話載っていたことを思い出した。「サ神」という、今まで聞いたことのない神の話だ。

山の神信仰というものがあり、山の神をサ神と呼ぶ地方があったという。里に近い桜の木の下にサ神が降臨するという古い祭祀の習慣があったようだ。神が降臨する場所を「クラ」と呼ぶ。「木の下にサ神が降臨したクラ」が「さくら」の語源だというのだ。

あまりにも印象的な話だったので、今後は桜の花を見るたびに「サ神」を思い出そうだ。何でも当地「相模原」の語源も、この「サ神」由来らしい。

それはさておいても、桜の花は大好きだ。花見に行きたくなってしまった。(2018年3月31日、斎藤記)



今年も美しく咲いた相模女子大の桜(相模原市南区文京・女子大前通りで撮影)

あじまりかんの渦—円錐形はすべて神を表している(2)



図4：巻貝(アクセサリーパーツ)



図5：鏡餅も円錐形である



図6：丹後半島籠神社の奥宮「真名井神社」の磐座。ここに目に見えない神霊の竜巻（逆円錐形の大元霊の渦）が渦巻いているのを霊視した人がいる。



丹後国一之宮 ^{この}元伊勢籠神社（HP「天橋立観光ガイド」より）

【元伊勢籠神社について】

籠神社は奥宮真名井神社（本文参照）の地から現在の籠神社の地に遷宮され創建された。籠神社が創建されるまで真名井神社は吉佐宮（よさのみや）と呼ばれていた。

神代より天照大神の孫神で邇邇芸命の兄神である彦火明命（海部家始祖）が豊受大神をお祀りしていた。その後天照大神は第十一代垂仁天皇の御代に、又豊受大神は第二十一代雄略天皇の御代にそれぞれ伊勢にお遷りになった。（丹後一宮 元伊勢籠神社 HPより要約）

【あじまりかん講座のご案内】

◎相模大野講座

2018年4月15日（日）9:00～13:00

ユニコムプラザさがみはらにて

◎高松地方講座

2018年5月12日（土）13:00～17:00

高松市サンポートホール高松にて

申し込みは友の会ホームページからお願いします。

https://ajimarikan.com/schedule_2017_2018/

発行人：斎藤敏一／あじまりかん友の会 あじまりかん通信編集部

印刷所：銀河書籍

発行所：あじまりかん友の会

〒252-0333 神奈川県相模原市南区東大沼 4-11-10

Tel/Fax: 042-712-3004

Mail: tomonokai@ajimarikan.com